

論文審査の要旨および担当者

報告番号	甲 第 号	氏 名	ウルヴェ 京
論文審査担当者：	主査	慶應義塾大学大学院 教授	博士（政策・メディア） 神武 直彦
	副査	慶應義塾大学大学院 SDM 研究科附属 SDM 研究所 顧問	博士（工学） 狼 嘉彰
		Abertay University 教授	博士（スポーツ心理学） David Lavallee
		東海大学体育学部生涯スポーツ学科 准教授	博士（体育科学） 武田 大輔
(論文審査の要旨)			
<p>ウルヴェ京君提出の学位請求論文は "Design of Psychological Self-Help Support for Olympic Athletes after Retirement"（オリンピック選手の競技引退後における心理的自助支援の設計）と題し、本文7章からなる。</p> <p>本論文は、オリンピック選手の競技引退後における心理的困難を解決するための自助支援の設計と評価について論じている。オリンピック選手の競技引退時には様々な困難に直面することが指摘されており、それに対応した多面的支援を各国オリンピック委員会では実践しているが、実践されている支援の有効性を学術的な理論を用いて評価している研究は限定的である。また、競技引退時の困難の一つである心理的困難は引退後も長く続くことが明らかになっているにもかかわらず、所属していた競技団体での選手登録から外れた引退選手は、従来行われている支援では、その対象外となることが多い。さらに、オリンピック選手のような一流選手は引退後の心理状態により、他者に支援を求めることが困難であることが指摘されており、引退した一流選手の実態が十分把握されていない。そのため、本論文では、引退したオリンピック選手の競技引退後における心理的困難を明らかにするプロセス並びにそれに基づく各個人に対応した心理的自助支援を設計し、その有効性を評価することを目的としている。</p> <p>まず第1章「序論」では、オリンピック選手の競技引退時における様々な困難に対応した多面的支援を各国オリンピック委員会が実践している現状を示すと同時に、心理的困難は引退後も長く続く事例を述べている。特に一流選手は競技引退後の心理状態により、他者へ支援を求めることが困難であることを明らかにしている先行研究を示し、引退選手の実態が見えにくくなっている現状と、そのために引退選手の心理困難に対する支援設計が難しいという課題を述べている。</p> <p>第2章「先行研究」では、これまでのオリンピック選手を含むエリート選手の競技引退研究と様々な競技引退に関する概念モデルを紹介し、さらに、各国オリンピック委員会の既存支援プログラムを分析し、競技引退後における課題を明らかにしている。</p> <p>第3章「日本のオリンピック選手に対する既存のキャリア支援プログラムの調査」では、既存の引退適応概念モデルの影響因子のひとつである「社会的利用可能な資源」について、キャリア支援の実態を調査している。その結果、日本のキャリア支援は職業就業支援を発展させたものが多く、心理学的な支援が行われていないことを明らかにしている。</p> <p>第4章「引退したエリート選手の支援ニーズの分析」では、心理学的な専門家による心理支援のない日本のキャリア支援の現状から、日本のオリンピック選手が引退後にどのような支援を必要としているのかを明らかにするため、モデルの各因子（引退理由、発達体験、競技引退への適応に向けた困難）について引退したオリンピック選手を調査している。心理的理由による引退の実態や、競技人生での発達体験が引退後のアイデンティティ形成や自信喪失に影響を与えていることを明らかにし、引退後の適応においては、「他者へ支援を求めることが困難である」という課題を明らかにしている。</p> <p>第5章「心理的自助支援の提案」では、引退適応概念モデルの各影響因子を分析することで明らかになった「他者へ支援を求めることが困難である」という課題を解決するための心理的自助支援を設計している。支援の設計においては、ステイクホルダーの整理と各ステイクホルダーのニーズ抽出を行い、日本のキャリア支援において心理支援が行われていない現状を考慮した要求分析によって「一流選手のためのメンタルヘルスリテラシーの概念」を用いることを論じている。さらに、自助支援の有効性は「選手が専門家に相談する度合いを高めること」で検証を行うこととし、19人のオリンピックメダリストを含む24人の競技引退した女性オリンピック選手を対象としたワークショップを行い、その有効性を評価している。</p> <p>第6章「考察」では、引退適応概念モデルへの理論的貢献の提案、心理的自助支援の実践的貢献、限界と将来の方向性、という3つの観点から本論文で設計した支援についての考察を述べている。</p> <p>最後に、第7章「結論」では、本論文の結論を述べている。</p> <p>以上により、著者の研究は、他者に支援を求めにくい心理を抱えるオリンピック選手の競技引退後の心理的困難という実態の見えにくい研究事例において、システムズエンジニアリングの考え方をを用いることによってプロセスと支援ツールを設計し、その有効性を評価している研究であり、システムデザインマネジメント学の発展に寄与するところが大きい。従って、本論文の著者は博士（システムデザイン・マネジメント学）の学位を受ける資格があるものと認める。</p>			